いわゆる三人称単数の動詞形における数記号素の不在

川　　島　　浩 一 郎*

1. はじめに

単数，複数，双数のような数的な存在様式を表現するための最小の表意単位を，数記号素と呼ぶ．たとえば（1）の les hommes や ont，romantiques には，数記号素の実現形が含まれる．この数記号素は，複数記号素である．つまり（1）の les，hommes，ont，romantiques にはそれぞれ，複数性を表示する切片が含まれている[1]．

（1）*Les hommes* aussi *ont* le droit d'être *romantiques*.（Sophie Fontanel, *Fonelle est amoureuse*, Collection J'ai lu, 2004, p.158）

（2）*Un homme* responsable *paie*.（Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.180）

いわゆる三人称単数と呼ばれる動詞形は，そこに数記号素の実現形が含まれると解釈されることが少なくない．動詞形を表す「三人称単数」という伝統的な用語の「単数」という部分は，まさに，この解釈を反映していると言ってよい．たとえば（2）の paie という動詞形には，単数記号素の実現形が含まれると解釈されることが少なくない．

---

* 福岡大学人文学部教授

[1] 名詞記号素の実現形（hommes）において複数性を表示している数記号素の実現形が，定冠詞記号素の実現形や動詞形，形容詞記号素の実現形の部分にも不連続的に現れている．

しかし，三人称単数と言われる任意の動詞形に数記号素の実現形が含まれることはありえない．本稿では主に，このことを論証する．つまり三人称単数と言われる動詞形を「単数形」の動詞形であるとする解釈が，誤りであることを示す．ようするに（2）の paie という動詞形には，単数記号素の実現形も複数記号素の実現形も含まれてはいない．

（3） *De la neige* apparut.（Maxime Chattam, *La théorie Gaïa*, Collection Pocket, 2008, p.169）

（4） […], *il* nous vient rarement des clients.（Albert Camus, *Caligula* suivi de *Le malentendu*, Collection Folio, 1958, p.200）

（5） J'ai de la chance, *c'*est tous les jours spectacle chez moi.（Anna Gavalda, *Je l'aimais*, Collection J'ai lu, 2002, p.41）

実際いわゆる三人称単数の動詞形は，数記号素の実現形と共起することができない主辞に，対応することもできる．たとえば（3）の主辞である（de la）neige は，部分冠詞記号素の実現形の存在が示すように，単数記号素の実現形とも複数記号素の実現形とも共起することがない．また（4）における非人称主辞も，（5）における中性代名詞記号素の実現形である ce（c'）も，数記号素の実現形とは共起することができない．これらの主辞に対応可能な動詞形が（いわゆる）三人称単数の動詞形であるのは，この動詞形に数記号素の実現形が含まれていないからにほかならない．この動詞形が「単数形」だからではない．

2. 表意単位とその実現形

2.1. 表意単位抽出の手続き

2.1.1. 表意単位の実現形としての必要条件

第一次分節の構成要素として抽出される単位を，表意単位と呼ぶ．それが，

発話の意味の変化に関与する単位だからである[2]．また，最小の表意単位は記号素と呼ばれる[3]．たとえば（6）には，最小の表意単位が二つ含まれる．これらの記号素はそれぞれ，bon および boulot という形で実現している．（7）には juste，une そして minute という，三つの記号素の実現形が含まれる．

（6）Bon boulot.（Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.449）

（7）Juste une minute.（Jean-Christophe Grangé, *L'Empire des Loups*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.458）

発話中のある切片が表意単位の実現形であるためには，その切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることによって，知的意味にもとづいた弁別が発話に生じることが必要である．表意単位は，すでに述べたように，第一次分節の構成要素として発話の意味の変化に関与する単位だからである．ゼロ切片という用語は，切片が不在の状態を意味する．知的意味という用語は，大略，言語共同体において共有される客観的，離散的な弁別にもとづく意味のことを指す．

条件（I）発話の一部分において，その切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる．

条件（II）この入れ換えによって，知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる．

すなわち，発話中のある切片が表意単位の実現形であるためには，少なくとも上の条件（I）および条件（II）がみたされることが必要である．たとえば（8）および（9）では，mot と geste を入れ換えることができる．つまり mot と geste が，条件（I）をみたす．また，この mot と geste の入れ換えによって，（8）

[2] 第一次分節という用語は，大略，伝達内容を複数の表意単位に分割して表現する仕組みを意味する．
[3] 表意単位には，記号素と連辞がある．連辞は，複数の記号素からなる複合体である．なお最小の表意単位は，形態素とも呼ばれる．

や（9）の意味に客観的，離散的な弁別が生じる．つまり mot と geste が，条件（II）をみたす．したがって mot と geste はそれぞれ，少なくとも pas un ... という文脈において，表意単位の実現形であるための必要条件をみたしていると考えてよい[4].

（8）Pas un *mot*, [...].（Fred Vargas, *Sous les vents de Neptune*, Collection J'ai lu, 2004, p.287）

（9）Pas un *geste*.（Jean-Christophe Grangé, *L'Empire des Loups*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.568）

（10）Pas un mot *à Relivaux*.（Fred Vargas, *Debout les morts*, Collection J'ai lu, 1995, p.84）

（11）Pas un geste, *now*.（Brigitte Aubert, *Rapports brefs et étranges avec l'ombre d'un ange*, Collection J'ai lu, 2002, p.85）

入れ換えの可能性が検証の対象となる切片には，いわゆる「ゼロ切片」も含まれる．たとえば（10）の à Relivaux は（8）の pas un mot にみられるように，ゼロ切片（切片が不在の状態）と入れ換えることができる．同様に（11）の now は（9）の pas un geste にみられるように，ゼロ切片と入れ換えることができる．そして，これらの入れ換えは（10）や（11）に知的意味にもとづいた弁別を生じさせる．よって（10）における à Relivaux や（11）における now は，表意単位の実現形としての必要条件をみたすと考えることができる．

ただし，条件（I）および条件（II）をみたす発話の切片が表意単位の実現形であるとはかぎらない．たとえば［po］における［p］と［bo］における［b］は，条件（I）と条件（II）をみたす．しかし，これらの［p］や［b］を表意単位の実現形と言うことはできない．これらの［p］や［b］は表意単位の実現形ではな

[4] ある文脈において表意単位の実現形としての必要条件をみたす切片が，他の文脈において同じ条件をみたすとはかぎらない．たとえば émotion の内部にある -mot- は，条件（I）や条件（II）をみたさない．

く，音素つまり最小の弁別単位の実現形である[5]．条件（I）および条件（II）をみたす発話の切片は，このように，表意単位の実現形でないこともある．

2.1.2. 表意単位抽出のための必要条件の必然性

発話中のある切片が表意単位の実現形であるためには，その切片が，少なくとも次の条件（I）および条件（II）をみたすことが必要である．条件（I）発話の一部分において，その切片を他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる．条件（II）この入れ換えによって，知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる．この二つの条件は，発話の切片が表意単位の実現形であることの必要条件である（2.1.1. を参照）．

（12）J'aime donner mon avis *sur tout*.（Fred Vargas, *Debout les morts*, Collection J'ai lu, 1995, pp.40-41）

（13）Il emprunte *surtout* les voies départementales.（Jean Echenoz, *Je m'en vais*, Minuit, 1999/2001, p.170）

条件（I）をみたさない切片を，表意単位の実現形であると言うことはできない．条件（I）に反して，かりに（12）の sur および tout を（ゼロ切片も含めて）他の切片と入れ換えることができないと仮定してみよう．この仮定によれば，これらの sur と tout は一体化して，分離することが不可能である．つまり（12）における sur と tout はいずれも，いわば（13）の surtout における sur- や -tout と同様に，記号素（最小の表意単位）の実現形の一部分にすぎないことになる（2.1.1. を参照）．

また条件（II）をみたさない切片を，表意単位の実現形であると言うこともできない．条件（II）に反し，（12）の tout を他の切片と入れ換えることはできるが，この入れ換えによって（12）に知的意味にもとづいた弁別は生じない

[5] 記号素を複数の弁別単位に分割して表現する仕組みを，第二次分節と呼ぶ．

と仮定してみよう．この仮定のもとでの tout を，表意単位の実現形と言うことはできない．どのような実現形を用いても（たとえば tout であろうが le sport であろうが la politique であろうが）知的意味にもとづいた弁別が発話に生じない文脈がもしあるとすれば，それは表意機能自体が働きえない文脈であると考えざるをえない．

したがって，発話の切片が上記の条件（I）あるいは条件（II）をみたさないとき，その切片を表意単位の実現形とみなすことはできないと言ってよい．条件（I）をみたさない切片は，記号素の実現形の一部分にすぎない．条件（II）をみたさない切片がもしあるとすれば，それは表意単位が現れえない文脈にしか現れえないような切片のはずである．

2.2. 表意単位のゼロ実現形

2.2.1. 表意単位と実現形の非「1 対 1」的な対応関係

表意単位とその実現形の間に，１対１の対応関係があるとはかぎらない．声の大きさ，話す速さ，アクセントの相違，男女差，年齢差，地域差，個人差など，音声面での様々な違いに着目すれば，同一の表意単位の実現形は無数に存在することになる．表意単位と実現形の間に厳密な１対１の対応関係が生じることのほうが，むしろ希な偶然とさえ思われる．

（14） Je *viens* chez toi tout de suite.（Fred Vargas, *Les jeux de l'amour et de la mort*, Édition du Masque, 1986, p.73）

（15） Vous *venez* souvent à la bibliothèque ?（Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.375）

（16） Il va falloir que vous m'en *disiez* plus.（Tonino Benacquista, *Quelqu'un d'autre*, Collection Folio, 2002, p.177）

（17） Vous *disiez* déjà ça tout à l'heure, […].（Jean Echenoz, *Cherokee*, Minuit, 1983/2003, p.216）

また，異音同義や同音異義の事例も少なくない．たとえば（14）の vien- と（15）の ven- のように，同一の表意単位が異なる実現形をもつことがある．この現象は，変異体あるいは異音同義と呼ばれる．また接続法現在の動詞形である（16）の disiez と直説法半過去の動詞形である（17）の disiez のように，異なる表意単位が（音声的な微細な違いを除けば）同じ形で実現することも珍しいことではない．この現象は，同音異義と呼ばれる．

したがって表意単位と「表意単位の実現形」の対応関係を厳密に特定するためには，実現形を決定的な論拠にすることはできない．表意単位とその実現形が，１対１に対応するとはかぎらないからである．実際（14）の vien- と（15）の ven- が異なる実現形であるからといって，これらが異なる表意単位の実現形であるということにはならない．また（16）の disiez と（17）の disiez が同一の実現形だからといって，これらが同一の表意単位の実現形であることにはならない．意味と形の関係は，一意的に定まるとはかぎらないと言ってよい．

2.2.2. ゼロ実現形の存在

表意単位が，具体的な実現形をもたないことがある．これを，表意単位のゼロ実現形と呼ぶ．たとえば（18）の français は，（19）の américains の場合と同様に，そこに複数記号素（複数性を表示する記号素）の実現形が含まれる．確かに（18）の français に含まれる複数記号素の実現形は，（18）の ils sont や（19）の américains に含まれる複数記号素の実現形とは異なり，知覚可能な実現形をもっていない．複数記号素のゼロ実現形を含む（18）の français は，それを含まない（20）の français と同形である．しかし（18）の français に含まれる複数記号素のゼロ実現形は，表意単位の実現形としての必要条件をみたす（2.1.1. を参照）．すなわち（18）の français において複数性を表示するゼロ実現形は，ゼロ切片と入れ換えることができる．そして，この入れ換えによって（18）の ils sont は（20）にみられるように，il est へと変化する．つまり，この入れ

換えによって，知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる．表意単位には，それがゼロ実現形として実現する可能性があると言ってよい．

（18）Ils sont *français* !（Maxime Chattam, *La théorie Gaïa*, Collection Pocket, 2008, p.346）

（19）Vous êtes *américains* ?（Maxime Chattam, *La théorie Gaïa*, Collection Pocket, 2008, p.346）

（20）Il est *français*, [...].（Guillaume Musso, *Que serais-je sans toi?*, Collection Pocket, 2009, p.14）

よって実現形としての切片の有無は，表意単位の有無とかならずしも同義ではない．たとえば（18）の français に含まれる複数記号素の実現形がゼロ実現形だからといって，そこに複数記号素の実現形がないわけではない．つまり，（18）の français において複数記号素が存在しないことにはならない．

ただし発話のある切片について，それを表意単位のゼロ実現形だと言うためには，そこに表意単位が存在することがまず立証されている必要がある．切片の有無は，まさしく，表意単位の有無と同義ではないからである．表意単位の不在が統辞的な問題であるのに対して，ゼロ実現形は，表意単位がどのような実現形をもつかという形態論的な問題である．意味と形の関係は，一意的に定まるとはかぎらないのである（2.2.1. を参照）．

2.3. 数記号素の存在と不在

2.3.1. 数記号素が現れうる文脈

単数，複数，双数のような数的な存在様式を表現するための最小の表意単位を，数記号素と呼ぶ．たとえば（21）の des enfants には，複数記号素の実現形が含まれると考えられる．実際（21）の des enfants には，複数性を表示する切片が含まれる．この切片は，（22）の un enfant にみられるように，他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる．また，この入れ換えに

よって知的意味にもとづいた弁別が発話に生じる．つまり（21）の des enfants には複数性を表示する，表意単位の実現形としての必要条件をみたす切片が含まれる（2.1.1. を参照）．この切片は，複数記号素という数記号素の実現形だと言ってよい．それが, des enfants の複数性を表示する最小の切片だからである．

（21）J'ai *des enfants*.（Eric-Emmanuel Schmitt, *Odette Toulemonde et autres histoires*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.76）

（22）J'ai une femme, *un enfant* [...].（Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, pp.633-634）

（23）[...], et *les enfants ont* l'air contents.（Frédéric Beigbeder, *Windows on the World*, Collection Folio, 2003, p.71）

（24）*L'enfant a* mal aux oreilles, [...].（Tania de Montaigne, *Tokyo c'est loin*, Collection Pocket, 2006, p.63）

数記号素の実現形は, 動詞形に含まれることもある. たとえば（23）の ont は, 主辞である（les）enfants の複数性に対応する動詞形である．つまり，この ont には複数性を表示する切片が含まれる[6]．この切片は，表意単位の実現形としての必要条件をみたす．すなわち（23）の ont において主辞の複数性を表示する切片は，（24）の l'enfant a ... にみられるように，他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができる．また，その入れ換えによって，発話に知的意味にもとづいた弁別が生じる．この切片は, 数記号素の実現形と考えられる．それが，複数性を表示する最小の切片だからである．

2.3.2. 数記号素が現れえない文脈

名詞記号素の実現形が不可算なものとして提示されたとき，その実現形は数記号素の実現形と共起することができない．不可算の対象には，数的な存在様

[6] 名詞記号素の実現形（enfants）において複数性を表示している数記号素の実現形が, 定冠詞記号素の実現形や動詞形の部分にも不連続的に現れている．

式の弁別がないからである．不可算の対象は，ようするに，数的な存在ではない．単数的な存在でもなければ，複数的な存在でもない．双数的な存在でもない．たとえば（25）の du sang における sang は，部分冠詞記号素の実現形の存在から明らかであるように，不可算の実現形として提示されている．よって（25）における sang は，単数的な存在でもなければ複数的な存在でもない．不可算の対象には，数記号素によって表現されるような数的な存在様式の弁別がないからである．

（25）*Du sang* coulait sur sa manche.（Tonino Benacquista, *Quelqu'un d'autre*, Collection Folio, 2002, p.365）

（26）*Il* existe pourtant des hommes mauvais.（Maxime Chattam, *Le sang du temps*, Collection Pocket, 2005, p.284）

（27）*La consigne c'*est la consigne.（Antoine de Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*, Collection Folio, 1946, p.50）

（28）*Les oiseaux, c'*est des oiseaux, c'est tout.（Fred Vargas, *L'homme aux cercles bleus*, Collection J'ai lu, 1996, pp.207-208）

非人称構文の主辞は，数記号素の実現形と共起することができない．非人称構文の主辞は，シニフィエをもたないからである．シニフィエを備えていない実現形は，まさにシニフィエがないために，そこに数的な存在様式の弁別がない．つまり非人称構文の主辞は，単数的な存在でもなければ複数的な存在でもないと言ってよい．たとえば非人称構文である（26）の主辞は，シニフィエをもたない．よって（26）の主辞としての il は，単数的な存在でもなければ複数的な存在でもない．そこに，数記号素によって表現されるような数的な存在様式の弁別がないからである．

中性代名詞記号素の実現形は，数記号素の実現形と共起することができない．中性代名詞記号素には，数的な存在様式についての弁別がないからである．つまり中性代名詞記号素は，単数的な存在と複数的な存在を弁別しない表意単位

である．実際（27）の la consigne と（28）の les oiseaux にみられるように，中性代名詞記号素の実現形としての ce（c'）は，単数的な存在と複数的な存在を弁別しない．この ce（c'）は（27）でのように「単数形」の名詞句を照応することもできれば，（28）でのように「複数形」の名詞句を照応することもできる．中性代名詞記号素の実現形には，数記号素によって表現されるような数的な存在様式の弁別がないからである．

以上の事例が示すように，数記号素には，それが現れることのできない文脈が存在する．たとえば名詞記号素の実現形が不可算なものとして提示された場合，その実現形は数記号素の実現形と共起することができない．非人称構文の主辞は，数記号素の実現形と共起しない．中性代名詞記号素の実現形も，数記号素の実現形と共起することはできない．

3. 三人称単数の動詞形における数記号素の実現形の不在

3.1. 数記号素の実現形と共起しえない動詞形の存在

動詞記号素の実現形のなかには，数記号素の実現形と共起できるものがある．たとえば（29）の ont という動詞形には，複数記号素の実現形が含まれると考えられる（2.3.1. を参照）．この動詞形に対応する主辞である（les）enfants ないしは ils に，複数記号素の実現形が含まれるからである．

（29）*Les enfants ont-ils* des habits, de la nourriture ?（*Elle*, 11 avril 2005, p.99）

（30）*Il faut* partir.（Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.415）

動詞記号素の実現形のなかには，数記号素の実現形と共起できないものもある．たとえば（30）の faut に含まれる動詞記号素の実現形は，数記号素の実現形と共起する可能性がない．非人称構文の主辞は，シニフィエを備えていないため，数記号素の実現形と共起しないからである（2.3.2. を参照）．

したがって，数記号素の実現形を含むことのできない動詞形には，単数記号素の実現形も複数記号素の実現形も含まれないと考えてよい．たとえば（30）の faut に，何らかの数記号素（たとえば単数記号素）の実現形が含まれると仮定してみよう．それがゼロ実現形であってもかまわない（2.2.2. を参照）．しかしながら，この動詞形にあっては，数記号素の実現形を他の切片と入れ換えることができない．ゼロ切片との入れ換えも不可能である．つまり faut という動詞形には，表意単位の実現形としての必要条件をみたすような数記号素の実現形は含まれていないことになる（2.1.1. を参照）．このような矛盾が生じたのは，faut という動詞形に数記号素の実現形が含まれるとする仮定が間違っているからにほかならない．ようするに，非人称構文の動詞形に数記号素の実現形は（ゼロ実現形としてさえ）含まれていないのである．

3.2. 異なる動詞形における動詞記号素の入れ換え

直説法単数現在と言われる，同一タイプの主辞を備えた複数の動詞形の相違は，多くの場合，そこに含まれる動詞記号素の相違に帰着する．つまり同一のタイプの活用がなされた動詞形の相違は，多くの場合，動詞記号素の違いに由来する．たとえば（31）の panique と（32）の faut の動詞形としての違いは，これらに含まれる動詞記号素の違いに帰着する[7]．

（31） Il *panique*.（Sylvie Testud, *Le Ciel t'aidera*, Collection Le Livre de Poche, 2005, p.125）

（32） Et ce chèque, […], il tombe pile quand il *faut* !（Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.206）

したがって直説法単数現在と言われる，同一タイプの主辞を備えた複数の動

[7] 動詞記号素の相違は，結局のところ，動詞記号素の実現形の相違として顕現する．

詞形においては，動詞記号素の実現形のみを入れ換えることができると考えてよい．すなわち panique と faut においては，それぞれの動詞形に含まれる動詞記号素の実現形だけを，互いに入れ換えることができる．これらの動詞形の相違は，それぞれに含まれる動詞記号素の相違のみに帰着するからである．

（33）Entrez, entrez… *Assoyez*-vous…（Anna Gavalda, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai lu, 2004, p.407）

（34）*Asseyez*-vous, je vous en prie…（Andrea H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.233）

なお直説法単数現在と言われる，同一タイプの主辞を備えた複数の動詞形の相違は，そこに含まれる動詞記号素の相違ではなく，動詞記号素の実現形の相違に由来することもある．たとえば（33）の assoyez と（34）の asseyez は，変異体の関係にある（2.2.1. を参照）．つまり assoyez と asseyez には，同一の動詞記号素と同一の人称記号素が含まれる．これらの動詞形が異なるのは，そこに含まれる動詞記号素や人称記号素が異なるからではなく，そこに含まれる動詞記号素の実現形が異なるからである．

3.3. 直説法三人称単数現在の動詞形における数記号素の実現形の不在

直説法現在と言われる動詞形のなかには，数記号素の実現形と共起できないものがある．たとえば（35）における faut は，数記号素の実現形と共起することができない（2.3.2. および 3.1. を参照）．この動詞形には，単数記号素の実現形も複数記号素の実現形も含まれることがない．つまり，この faut は「単数形」の動詞形でもなければ「複数形」の動詞形でもない．

（35）Puisque c'est un jeu, il *faut* des règles.（Anna Gavalda, *Je l'aimais*, Collection J'ai lu, 2002, p.132）

（36）Il *fait* des dessins, […].（Sébastien Japrisot, *Compartiment tueurs*, Collection Folio, 1962, p.75）

「直説法現在の非人称構文の動詞形」と「直説法三人称単数現在の動詞形」においては，動詞記号素の実現形だけを，互いに入れ換えることができる．これらの動詞形の相違は，動詞記号素の実現形の入れ換えのみに帰着するからである（3.2. を参照）．たとえば「直説法現在の非人称構文の動詞形」である（35）の faut と「直説法三人称単数現在の動詞形」である（36）の fait においては，それぞれに含まれる動詞記号素の実現形だけを，互いに入れ換えることができる．これらの動詞形の相違は，この入れ換えにしか基盤がないと言ってよい．

ここで，直説法三人称単数現在と言われる動詞形に，数記号素の実現形が含まれると仮定してみよう．たとえば（36）の fait に，数記号素（たとえば単数記号素）の実現形が含まれると仮定しよう．実のところ，動詞形を表す「直説法三人称単数現在」という伝統的な用語の「単数」という部分には，この仮定が含意されていると考えられる．この仮定のもとでは，直説法現在の非人称構文の動詞形（たとえば faut）に数記号素の実現形が含まれていないのに対して，直説法三人称単数現在と言われる動詞形（たとえば fait）には数記号素の実現形が含まれていることになる．

この仮定にもとづくかぎり「直説法現在の非人称構文の動詞形」と「直説法三人称単数現在の動詞形」において，動詞記号素の実現形だけを入れ換えることはできない．つまり faut と fait において，動詞記号素の実現形だけを入れ換えることはできないことになる．前者の動詞形には，数記号素の実現形が含まれていない（2.3.2. および 3.1. を参照）．一方，後者の動詞形にはそれが含まれていることが仮定されている．つまり，これら二種類の動詞形（たとえば faut と fait）において，動詞記号素の実現形を入れ換えようとすれば，数記号素の実現形の有無も連動して入れ換わってしまうことになる．この仮定のもとでは，動詞記号素の実現形と数記号素の実現形がなかば一体化して，切り離し難いような状態が生じてしまうのである（2.1.2. を参照）．

よって，この仮定からは明らかな矛盾が生じると言ってよい．「直説法現在

の非人称構文の動詞形」と「直説法三人称単数現在の動詞形」においては，動詞記号素の実現形だけを，互いに入れ換えることができるからである（3.2. を参照）．つまり faut と fait という動詞形においては，動詞記号素の実現形だけを互いに入れ換えることができるはずである．

したがって，直説法三人称単数現在と言われる動詞形に数記号素の実現形が含まれるとする仮定は，間違っていると考えざるをえない．この仮定からは，矛盾が生じるからである．よって（36）の fait には，数記号素の実現形は含まれていない．ようするに，直説法三人称単数現在と言われる任意の動詞形に，数記号素の実現形は（ゼロ実現形としてさえ）含まれないという結論になる．

3.4. 三人称単数の動詞形における数記号素の実現形の不在

直説法三人称単数現在と言われる任意の動詞形に，数記号素の実現形は含まれない．たとえば（37）の fait に，数記号素（たとえば単数記号素）の実現形は含まれていない（3.3. を参照）．動詞形を表す「直説法三人称単数現在」という伝統的な用語のうち少なくとも「単数」という部分には，誤りがあると言ってよい．（37）の fait は「単数形」の動詞形ではないのである．

（37）Il *fait* un peu anglais.（Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.162）

（38）Il *a fait* une dépression.（Fred Vargas, *Dans les bois éternels*, Collection J'ai lu, 2006, p.226）

（39）Il courait, il *faisait* du jogging.（Brigitte Aubert, *Descentes d'organes*, Collection Points, 2001, p.42）

（40）Désormais, il *ferait* son métier en artisan, […].（Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.395）

（41）Après tout, je ne fais que mon travail. Qu'il *fasse* le sien.（Thierry Breton & Denis Beneich, *Softwar*, Collection Le Livre de Poche,

1984, p.180）

したがって三人称単数と言われる任意の動詞形に，数記号素の実現形は（ゼロ実現形としてさえ）含まれないと考えられる．叙法や時制，アスペクトに変化があっても，動詞形における数記号素の実現形の有無に影響は生じないからである．よって三人称単数と言われる動詞形，たとえば（38）の a fait,（39）の faisait,（40）の ferait,（41）の fasse には，fait の場合と同様に，数記号素の実現形は含まれないと言ってよい．これらは「単数形」の動詞形ではない．

3.5. 数記号素の実現形と共起しない主辞と動詞形

主辞のなかには，数記号素の実現形と共起しないものがある．通常，数的な存在様式に弁別がない文脈にあっては，数記号素の実現形は現れることができない（2.3.2. を参照）．たとえば（42）の de la neige のように不可算の対象として提示された名詞句は，数記号素の実現形と共起できない．非人称構文の主辞である（43）の il も，数記号素の実現形とは共起しない．（44）における ce（c'）のような中性代名詞記号素の実現形も，数記号素の実現形と共起することはできない．

（42） *De la neige est entrée* dans mes chaussures.（Philippe Djian, *37°2 le matin*, Collection J'ai lu, 1985, p.135）

（43） *Il* vous *vient* des envies de fête, de joies enfantaines.（Thierry Jonquet, *Comedia*, Collection Folio, 2005, p.113）

（44） [...] : Kate Phillips tombe enceinte, manque de chance, *c'*est des jumeaux.（Maxime Chattam, *L'âme du mal*, Collection Pocket, 2002, p.490）

よって，数記号素の実現形と共起できない主辞に対応する動詞形もまた，数記号素の実現形と共起することはない．数記号素の実現形が，動詞形に対応する主辞に含まれないからである．実際（42）の est entrée,（43）の vient,（44）

の est のような動詞形に，数記号素の実現形は含まれていない（3.3. および 3.4. を参照）.

したがって，数記号素の実現形と共起できない主辞に対応することができる動詞形は，数記号素の実現形を含まない動詞形だと考えざるをえない．たとえば（42）において（de la）neige という主辞に est entrée という動詞形が対応できるのは，この動詞形に数記号素の実現形が（ゼロ実現形としてさえ）含まれていないからである．また（43）において，非人称の主辞に vient という動詞形が対応するのは，この動詞形に数記号素の実現形が（ゼロ実現形としてさえ）含まれていないからである．同様に（44）において，中性代名詞記号素の実現形である ce（c'）という主辞に est という動詞形が対応できるのは，この動詞形に数記号素の実現形が（ゼロ実現形としてさえ）含まれていないからである．これらの動詞形が「単数形」だからではない.

4. おわりに

三人称単数と言われる任意の動詞形に，数記号素の実現形は，ゼロ実現形としてさえ含まれない．たとえば（45）の aiment という動詞形には，複数記号素という数記号素の実現形が含まれる．その意味において, この aiment は「複数形」の動詞形だと言ってよい．しかし（46）における meurt という動詞形に，数記号素の実現形は（ゼロ実現形としてさえ）含まれていない．つまり，この meurt という動詞形は「単数形」の動詞形ではない．動詞形を表す「三人称単数」という伝統的な用語の少なくとも「単数」という部分は，端的に言って誤りである.

（45）Les enfants *aiment* la musique.（Amélie Nothomb, *Métaphysique des tubes*, Collection Le Livre de Poche, 2000, p.16）

（46）Une enfant *meurt*.（Brigitte Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, pp.238）

主辞のなかには，数記号素の実現形と共起しないものがある．たとえば（47）の（du）sang のように不可算の対象として提示された名詞句は，数記号素の実現形と共起できない．非人称構文の主辞である（48）の il も，数記号素の実現形とは共起しない．（49）や（50）における ça のような中性代名詞記号素の実現形も，数記号素の実現形と共起することはできない．これらの主辞にあっては，数的な存在様式に弁別がないからである．これらの主辞は，単数的な存在でもなければ複数的な存在でもない．

（47） *Du sang coulait* dans la neige depuis sa cuisse et son torse.（Maxime Chattam, *In tenebris*, Collection Pocket, 2002, p.279）

（48） Maintenant, *il existe* même des médicaments pour cela.（Andrea H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.171）

（49） *Ça* n'*existe* pas, des ex-enfants.（Agnès Abécassis, *Les tribulations d'une jeune divorcée*, Collection Pocket, 2004, p.306）

（50） Un conseil de fille *ça peut* toujours aider, non ?（Marc Levy, *Mes amis Mes amours*, Collection Pocket, 2006, p.102）

したがって，数記号素の実現形と共起できない主辞に対応可能な動詞形は，数記号素の実現形を含まない動詞形だと考えざるをえない．実際（47）において（du）sang という主辞に coulait という動詞形が対応できるのは，この動詞形に数記号素の実現形が含まれていないからである．（48）において，非人称の主辞に existe という動詞形が対応するのは，この動詞形に数記号素の実現形が含まれていないからである．また（49）や（50）において，ça という主辞に existe や peut という動詞形が対応できるのは，これらの動詞形に数記号素の実現形が含まれていないからである．これらの動詞形が「単数形」だからではない．

参考文献

川島浩一郎（2005）「フランス語の「現在形」をめぐる一考察」『福岡大学研究部論集』第 5 巻第 1 号 A : 人文科学編，福岡大学研究推進部，13 − 28.

川島浩一郎（2011）「単数性と非複数性 ― 定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分としての定冠詞 ―」『ふらんぽー』第 36 号，東京外国語大学フランス語研究室，17 − 33.

川島浩一郎（2012）「二つの c'est と指示の問題」『福岡大学人文論叢』第 44 巻第 2 号，福岡大学研究推進部 , 381 − 399.

川島浩一郎（2013）「直説法記号素の不在とその非経験的論証」『福岡大学人文論叢』第 45 巻第 3 号，福岡大学研究推進部，269 − 290.

川島浩一郎（2015）「いわゆる直説法三人称単数現在の動詞形 ― 時制、アスペクト、法、態、人称、数の不在 ―」『ふらんぽー』第 40 号，東京外国語大学フランス語研究室，57 − 75.

川島浩一郎（2017）「直説法現在の動詞形におけるアスペクト記号素の不在」『福岡大学人文論叢』第 49 巻第 2 号，福岡大学研究推進部 , 511 − 525.

MARTINET, André（1979）, *Grammaire fonctionnelle du français*, CREDIF.

渡辺佳奈（2009）「フランス語における「現在形」のステイタス ― 有標の項の結束点としての無標の現在形 ― 」『フランス文学論集』第 44 号，日本フランス語フランス文学会九州支部，1 − 17.

渡瀬嘉朗（2012）『統辞理論の周辺』三修社.